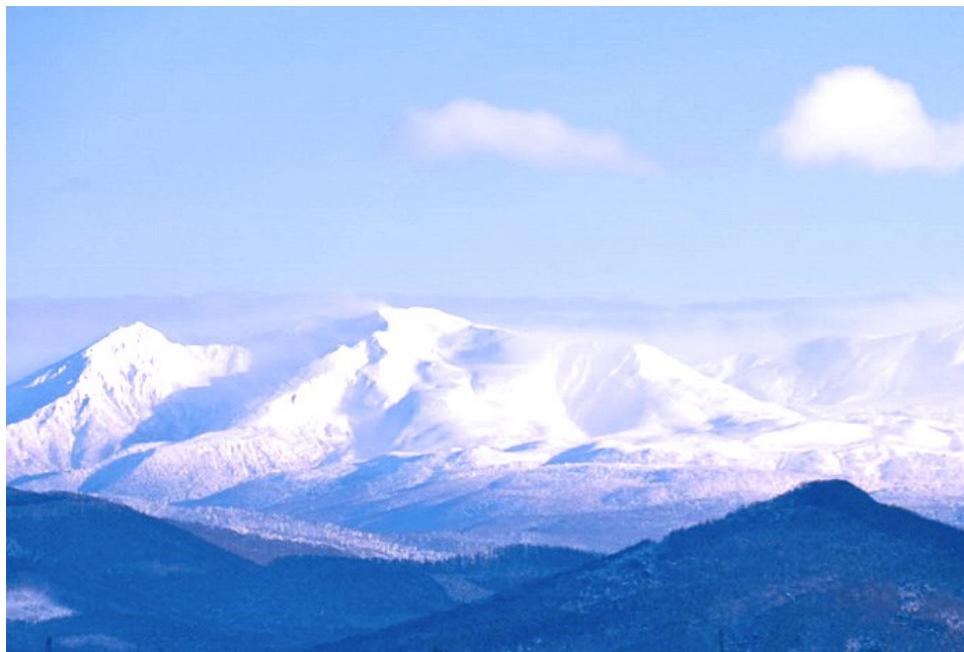


第 373 号

令和3年1月22日発行

- 巻頭 言
- 論 別 寄 文
- 文 さ り な が 稿
- 後 期 情 報 芸
- 事 務 局 日 誌



タイトル 「窓外遠景」
旭川市立永山南中学校
福澤 秀

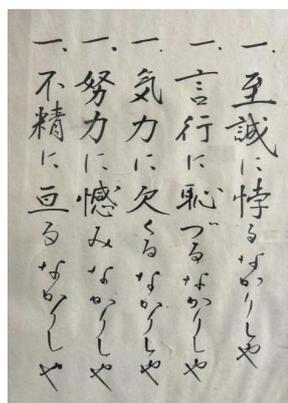


「五 省」

北海道中学校長会 副会長

函館市立巴中学校 佐竹 聡

- 一、 至誠に忝る勿りしか
- 一、 言行に恥づる勿りしか
- 一、 氣力に欠くる勿りしか
- 一、 努力に憾み勿りしか
- 一、 不精に亘る勿りしか



本校の校長室に、額装され掲げられている言葉である。それぞれの意味は、以下である。

- 一、 真心に反する点はなかったか
- 一、 言行不一致な点はなかったか
- 一、 精神力は十分であったか
- 一、 十分に努力したか
- 一、 最後まで十分に取り組んだか

昭和7年、当時の海軍兵学校長の松下元少将の発案で、生徒がその日の行いを自省自戒するために自らへ発していた五つの問いかけである。

この額は、以前教頭として勤務をした的場中学校の校長室に掲げていたものである。当時仕えた校長が

「毎日この書を目にすることで自身を振り返り、また新たな気持ちで日々の学校経営にあたっていくために」と大切にされていたものである。

その校長は、これまでの的場中学校に着任した歴代の校長は皆、やはり毎日この書を目にし、その都度自身自身の行いを見つめ、学校経営にあたってきたのだということをお話してくださった。誰が、いつ掲げたのかはわからない。ただ、数十年以上前であることは確かだろう。

さらに、その校長は、「師弟同行・率先垂範」を旨に、教職員や生徒とともに日々の努力を惜しまず、常に率先して範を垂れるためには、五省の精神が不可欠であるのだとも教えてくださった。そのことは、今でも強烈に覚えている。

私が現在校に着任するとき、この額は統合によりあやうく廃棄されるところであったものを探し出し、幸いにも残すことができた。以来、私も校長室に掲げ、五省を繰り返して3年間が過ぎようとしている。私にとってこの言葉は、自分を鼓舞したり、省みたり、次へのやる気を引き出す原動力となった。これからも校長室で、ある意味孤独な校長に対し、師弟同行・率先垂範こそが経営姿勢の基本であると語りかけ、巴中学校の学校経営を陰から支えていってくれるのではないだろうか。

【論文】

多様な学びを保障し、自己実現を支援する

～ 特別支援教育の推進を通して ～

函館市立旭岡中学校 田上 直広

1 はじめに

本校は、函館市の東側に位置する小高い丘の上であり、豊かな自然環境に恵まれた学校である。多くの生徒が暮らす旭岡団地は、昭和50年度以降に函館市都市計画のもとで造成され、昭和56年度に本校が開校した。今年度開校40周年を迎えている。現在の中学生は、ほとんどが校区の旭岡小学校の出身である。最大規模時には、12学級で約350人もの生徒が在籍していたが、現在は各学年1学級+支援級の4学級で生徒数は104人と減少傾向が続いている。

2 学校経営推進の柱

【本校教育の使命】

- ・生徒を核に、旭岡中学校に関わるすべての人々が、より心豊かな生活をおくれるようにする
- ～ すべての生徒が、保護者・地域の支えのもと安心して学び合い、その成長した姿が教職員の働きがいとなり、保護者・地域へとフィードバックされる学校となる～

【教育目標】

- ・自ら考え学び 自己実現できる人 (自律)
- ・自他を敬愛し ともに生きる人 (感謝)
- ・心身を磨き 社会形成に参画する人 (貢献)

【経営ビジョン】

- ・生徒一人一人に、多様な学びを保障する
- ・生徒一人一人の、自己実現を支援する

【重点教育目標】

- ・自ら考え、判断し、表現できる生徒の育成

3 特別支援教育を中心に

今年度、本校に特別支援学級が新設された。これまで、校区小学校で支援学級に在籍していた生徒が、中学校では通常の学級で同じく学ばざるを得ない状況にあった。インクルーシブ教育に努めてはいても、現実的には学習や集団への不適応生徒が不登校に陥るなど、課題も多かった。そこで、これを機に学校経営の柱に特別支援教育を据え、特別支援学級を有効活用し、学校全体で困り感のある生徒を個別に支援する体制を整備した。また、その視点を全教育活動にいかしながら、個に応じた多様な学びを保障しようと組織的に取り組んできた。

4 具体的な取組

(1) 特別支援委員会の積極的・効果的活用

特別支援コーディネーターを中心に、月1プラス必要に応じて開催。主内容はサポートシート・個別記録

を用いた情報交流、具体的な支援内容の確認。

(2) 合理的配慮・ユニバーサルデザインの推進

全教育活動や学習環境を通して推進(校区小学校とも連携)。年度当初に外部講師を招聘。研修会を開催し、実践のための基礎的・基本的内容を確認する。毎回の職員会議に「特別支援委員会から」を短時間設定し、情報共有や資料提供等を実施。

(3) 交流(共同)学習および通級指導の積極的推進

支援級生徒には、本人の興味・関心に応じて教科への交流学习を推進。通常の学級で困り感のある生徒には、支援級を活用した通級の支援を実施。

(4) 不登校(傾向)生徒への個別のプログラム支援

支援級もしくは別室にて個別のプログラム学習や生活支援を組織的に実施。1日のタイムテーブルや毎時間の支援担当者については、特別支援教育コーディネーターが共有データに入力し職員室可視化ボードに記入。担当は全職員と学習指導員。

(5) 数学習熟度、英語TTにおける個別支援

学習支援を要する生徒が、遅れを実感しがちな英数において個別支援を強化。管理職もサポートに入り、常時2～3人体制で実施。



(6) 近隣の養護学校、高校とのノーマリー教室連携

2校に協力を仰ぎ、体験学習や講演会を実施。養護学校生徒、校区小学校や地域関係者とともに、中学生がリーダーとなる校区清掃活動を年1回開催。

5 終わりに(成果と課題)

今年度は、コロナ禍のため上記4の(6)は未実施となったが、発達課題や特性の異なる生徒一人一人にも、多様な学びを保障することで不登校生徒が減り、自己実現への具体的な支援を行うことができた。また、特別支援教育の視点を大切にするすることで、カウンセリングマインドや合理的配慮など職員の総合的な指導力の向上につながり、生徒および保護者の授業評価や学校評価の数値も伸びた。今後も、チーム学校としての特別支援教育を充実させつつ、ポストコロナやGIGAスクール構想をふまえ、個別最適化を図る学習や生活への支援と、共同(協働)的な学びをバランス良く推進していきたい。予測不能な未来社会を生き抜いていかなければならない子供たちの幸せを願い、一人も取り残すことのない学校づくりに尽力していきたいと考えている。

【論 文】

学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメント

～ 目指す目標・子ども像の共有と地域・家庭・学校の連携・協働 ～

白糠町立庶路学園

福原 克洋

1 はじめに

白糠町は、北海道の東部、釧路管内の西部に位置し、「第一次産業の再興と振興、健康づくり、教育」を3本柱とした施策のもと、学校給食費、保育料や18歳までの医療費の無償化等、子育て応援日本一を目指している町である。学校教育においては、ふるさと教育を基軸としながら、平成30年度より町内各校において、小中一貫教育を導入した。本校は平成30年度に、義務教育学校として開校し、現在3年目を迎えている。校舎は高台にあり、地域の防災拠点ともなる学校である。

開校3年目を迎えるにあたっての学校課題を「目指す目標、子ども像を共有し、地域・家庭・学校が連携・協働して実現を目指す」とし、学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメントを通して、参画意識を高め、教育活動を推進している。

2 目指す子ども像の共有化

開校準備を進める中で、「進むべき道を自ら描き、仲間と関わりながら努力を続ける人」を15歳の子ども像と設定し、開校を迎えた。新たな学校として教育活動を進める中で、それぞれの学年やブロック（本校は4-3-2制）で目指す、具体的な子ども像を求める声が高まり、教職員全員でブレインストーミングを行い、目指す姿の共有化を図った。学校運営協議会でも協議し、キャリア教育をベースとしたそれぞれのブロックでの目指す子ども像を確立した。今年度は、児童生徒とも共有すべく、庶路学園の3愛（学び合い、伝え合い、高め合い）として、校長から直接子どもたちにも説明を行った。

3 特別活動、総合的な学習の時間の見直し

目指す子ども像の実現を図るための第一歩として、昨年度、旅行宿泊的行事の見直しを全教職員で行った。その結果、遠足の在り方や7年生（中1）における宿泊的行事が課題となった。遠足については、1～7年生まで徐々に距離を伸ばしていき、最終的には8年生の宿泊研修での登山をゴールとすることとした。また、5年生から始まる宿泊的行事が、7年生で一端途切れること、庶路学園が自然災害の際に防災拠点となることから、7年生において防災宿泊学習を行うことで系統性をもたせることができるとの結論に至った。

防災宿泊学習を7年生で導入することに伴い、改め

て総合的な学習の時間について見直しを行い、防災を核とした学習の系統性を整理した。また、会議室に総合的な学習の時間と生活科の時間の一覧を拡大、掲示し、各教科との関連や教職員からのアイディアを自由に記入してもらい、最終的に教務が実現可能な内容として整備した。改めて、9年間の系統性や目指す子ども像との関連について意識化を図ることができた。

4 学校運営協議会と協働の防災宿泊学習実施

庶路学園は開校と同時に学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールを導入している。学校運営協議会は学校の応援団として、登下校の見守りや学習支援など非常に協力的である。今年度初めて行った防災宿泊学習については、庶路学園が避難所であること、そして、実際には地域住民が中心となって避難所運営を行うことから、計画段階から学校運営協議会と共同で企画を行ってきた。

学校運営協議会としても、今年度「地域防災に向けた防災の取組の推進」を目標に掲げた。前年度から学校運営協議会と話し合いを重ね、避難所運営についての学習を7年生と地域住民が一緒に行った。防災宿泊学習当日は、地域防災課の全面的なバックアップも受けながら地域住民、生徒、保護者が参加し、今までよりも顔の見える関係の中で、実施できたことが何よりの成果と考えている。



5 おわりに

目指す子ども像の確立と具現化のための話し合いによって、具体的な教育活動に結びつけることができた。また、各教科とのつながりや系統性、地域人材の活用にもつながっている。次年度の学校経営の方向については、10月下旬には教職員に示し、その上で、課題について教職員とともにブレインストーミング等を活用して話し合いを行う予定である。課題は山積しているが、教職員の必要感をもとに話し合いを行うことで、経営参画意識をもって、教育活動にあたることにつながると考えている。今後も常に評価・改善を行いながら学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメントを意識し、学校経営を進めていきたい。

【論 文】

「目標→実践→評価」の実効性を

高める取組を通じた学校経営の充実

長万部町立長万部中学校

渡邊 直樹

1 はじめに

学校経営を充実させるためには生徒や地域の実状を踏まえ、長期はもとより中期・短期のPDCAサイクルで改善を図る取組を継続する必要がある。

本校が直面する課題解決に向けて、教職員の意識改革を図りながら、わずかずつではあるが日々学校改善に向けて取り組んでいるところである。

2 学校経営充実に向けた取組

(1) 本校の課題

令和元年度、本校に着任した際には次のような状況が見られ、本校教育活動の充実に向けて早急に課題解決する必要性を感じた。

- ①教育活動における「目標→実践→評価」の取組が形骸化し改善が図られにくい。
- ②教職員は真摯に取り組んでいるが、変化には消極的で前例踏襲の傾向がある。
- ③大きく勤務時間を超過する職員が見られる。

(2) 改善に向けた取組

課題解決のため次のような取組を行ってきた。

○学校教育目標の改訂 (①の改善に向けて)

教職員・生徒・保護者にとってシンプルで覚えやすく常に「目標」を意識できるよう見直しを行った。

○学校経営方針の簡略化 (①②の改善に向けて)

教職員に浸透しやすいよう端的な表現にするため無駄を省いて簡略化し、見直し前の半分に整理した。分掌の方針や各種計画等に反映されるよう努めた。

○学校経営要項の簡略化 (①②③の改善に向けて)

必要最小限の内容で実用的になるよう努めた。網羅的になる傾向の強い教職員の意識改革と作成する労力の削減を図り、全員が目を通せる分量にするため無駄な箇所の削除や重複箇所の整理を行った。

○学校評価の改善・充実 (①の改善に向けて)

各行事や事業等の反省においては、目標の達成度を評価することにより目標実現に向けた指導の必要性を意識させるとともに、実施後速やかに評価・反省し次年度の方向性を検討することにより評価結果を生かした改善が行われるよう努めた。

詳細に渡る学校評価の項目を見直し、全職員がかかわる項目・直接改善につながる項目に精選した。その作業を通じて学校評価の趣旨理解を深めるとともに実

効性のある学校評価となるよう努めた。

○既存組織の活用とOJTを通じた教職員の資質・能力の向上 (②の改善に向けて)

学校運営上の課題解決にあたっては、特別委員会(運営委員会、評価委員会、新年度準備委員会等)を機能させることにより、教職員に当事者意識をもたせ組織の活性化を図るとともに、中心メンバーとなる中堅職員の資質・能力の向上を図った。

○働き方改革の取組 (③の改善に向けて)

- ・カード読み取りシステムにより出退勤時刻を把握し教職員が勤務時間を意識するようになった。
- ・職員共有フォルダ上で情報共有することとして朝の打ち合わせを廃止した。
- ・職員会議でのペーパーレス化により印刷・配布の労力を削減した。
- ・学校行事等の見直し(定期テストの実施回数削減、学校祭、校内体育大会の平日開催・規模縮小)、仮評定の廃止による評定の回数削減、通知表の所見欄の削除又は簡略化などを通して業務量を削減した。

様々な学校運営上の業務の削減による支障はなくスムーズな業務推進が図られている。

(3) ピンチをチャンスに

令和元年度末からの感染症拡大の影響で臨時休業を含む緊急対応が迫られる中、教職員の安全管理は学校経営上欠かせないことであり、教職員の健康管理という名目を前面に押し出してこれまで進みにくかった時間外勤務の削減を強力に進めた。今後、定時退勤に向けて取組を加速していく。

臨時休業後の授業時数確保を目的として学校行事の準備時間の大幅削減、当日の内容スリム化を目指し平日開催を進めた。今年度の特殊事情もあり地域、保護者からの理解をスムーズに得ることができた。あわせて、このような実施状況においても学校行事のねらいを十分に達成できることが再確認された。

3 実践を通しての考察

先進性や独創性はなくごく当たり前の拙い実践であり、まだまだ解決すべき課題はあるものの、根気強い働き掛けによりわずかずつ着実に改善が進んできている。本校の課題の多くは教職員の意識改革にかかわるものであり、解決に当たっては教職員とのきめ細かなコミュニケーションはもとより、校長の強い信念と忍耐力が重要であることを改めて認識することとなった。

【特別寄稿】

「新型コロナ」パンデミックから考える
『立ち止まり，足るを知る』

せたな町教育委員会生涯学習指導主事 大口 久克

「新型コロナ」パンデミック。日本どころか，世界中が窮地に陥っている。誰がこのような事態になることを予想したであろうか。

過剰なまでに儲けることを厭わない。そのことへの違和感を持たなくなった社会。そのような社会は飽くなき利潤の追求のもとに世界中の原野を乱開発し，「新型コロナ」が寄生していた動物が人間に接近しだしたことが感染拡大の原初という。人間社会がウイルスを人間側に引き出したのである。

また，21世紀型のパンデミックの特徴は，ヒト・物などの大量で迅速な移動という時代が背景にあるとも。早ければ24時間で世界のどこにでも到着できる現在。人から人へと渡り歩くウイルスにとって，この時代は格好の温床となるからだ。

私たちはこういうときだからこそ，時代そのものを，そしてそれぞれの生き方を足元から見つめなおさなくてはならない。そのことを静かな語りで教えてくれたのは，かつての教え子Mさんであった。

映画「そののレストラン」（大泉洋主演）はせたな町を舞台にして，循環型農業（オーガニック営農）に取り組む自然派農民ユニット「やまの会」のメンバーにスポットライトを当てた。

そのメンバーの一人のMさん（主演のモデル）。40代の酪農家である彼が，どのような思いで循環型の営農に取り組んでいるかについて講演会で話したことが忘れられない。

「60歳になるある酪農家が言っていました。『立ち止まり，足るを知る』と。現状（足元）をしっかりと見つめれば，これ以上求めるものが他にあるのかがわかると。資源やエネルギーを今以上に求めるから欲がたくさん出てくる。『分け合えば足るのに，奪い合うから足りなくなる』との指摘が胸に染み入った」と。

欲望の肥大化を自制し，循環型の営農法に舵をきるMさんら山の会の皆さん。自分も家族もそして土地も豊かになる，持続可能な営農法の手法をとりながら社会全体が持続可能であることを大きな憧れとして日々の生活を営んでいる。

時代が生み出したパンデミック。その歯止めは，私たち一人一人がどのような社会のあり方を望むのか，そしてどのような生き方を選択するのかにかかっている。

地域に生きて育つ子ども

沼田町教育委員会元教育委員長 日暮 茂男

子供たちと「おはよう」「こんにちは」の挨拶を交わし，元気一杯行動する姿を目にすることは嬉しいことです。それは，地域に住む私たちに「生きる喜びと生きる活力」を与えてくれています。

その一つに「夜高（ようたか）あんどん祭り」があります。この祭りは，沼田町の開祖沼田喜三郎翁の故郷富山県小矢部市の祭りを昭和52年に取り入れ，毎年8月下旬の2日間行われます。今では「北海道3大あんどん祭り」と呼ばれるようになりました。小学生は高学年，中学生は全校生徒がそれぞれ1台5tの山車を牽きます。小学生の山車づくりにはPTAと地域の有志とで，中学生はPTAと一緒にあんどんの竹組みの紙貼り，絵描き色塗りを放課後・土・日・夏休み中に「わが町の夜高あんどん祭り」の想いで，粘り強く，祭りの前日までの100日間制作に携わります。

一方では，子供たちは先生の御指導の下，児童会・生徒会を中心に祭り当日の路上パフォーマンスの練習があります。それぞれが限られた日時のもとで，去年の先輩方が発表したものよりよりインパクトあるものと，創造と工夫を凝らし休み時間を惜しむように練習します。

祭り当日は「ヨイヤサァ ヨイヤサァ」の勇ましい掛け声を響かせ街中を練り歩き，路上パフォーマンスの歌や踊りを披露して万来の拍手を頂くのです。

このような祭りが出来るのは，この祭りが教育課程に組み込まれ故郷の歴史の学びと文化の伝承の実践を，小・中連携一貫教育の柱の一つとして位置付けているからです。伝統的な祭りの中に子供たちの表現力を生かしていると同時に大観衆の前で発表できるという歓び，達成感を味わい普段の生活に自信を持つことができているからです。また，地域の人からは，事あるごとに「よく頑張ったね。素晴らしかったね」と励ましと労いの声かけられます。子供たちは「地域に生かされ，生きている」と実感できるのです。

また，卒業して「夜高祭りに出たいから。この祭りが好きだから，沼田町に残りたい」その子は，今，沼田町教育委員会の吏員です。今年は，コロナ禍で中止でしたが，子供たちにはミニの発表の機会がありました。来年は盛大な祭りが出来るでしょう。

今から，子供たちの活躍が楽しみです。

【特別寄稿】

「おび学」の実施にあたって

帯広市教育委員会教育研究所長 高橋 譲

今年度、帯広市内の小・中学校では、教育課程に「おびひろ市民学」の時間を新たに位置付け、ふるさと教育の充実に努めています。これは、第七期帯広市総合計画に即し、令和2年から10年間にわたる帯広市教育基本計画の改訂にあたり、おびひろっ子の現状を踏まえて策定した9年間に及ぶ教育プログラムです。

＜目指す子どもの思い＞

- ・帯広市のことが好きだ
- ・これからの地域づくりに参画していきたい
- ・自分は地域や社会の未来に対して責任がある



＜「おびひろ市民学」の学びのイメージ＞

- ・義務教育9年間の学びを3つの段階に整理
 - 「知る（地域を知る）」 小1～小4
 - 「関わる（地域と関わり・考える）」 小5～中1
 - 「創る（地域・自分の未来を創る）」 中2～中3
- ・地域住民との対話を大切に、市民を先生にした多様な学びの提供
- ・フードバレーとかちの魅力、帯広市手話言語条例の理念、SDGsの取組など帯広の今を反映
- ・地域住民の協働・相互関心を高める情報発信
- ・学びのゴールとして市長への提案や自分たちの行動宣言の作成

市教委では、構想段階から学校や市の各課、関係機関とこれまで以上に双方向の連携に努め、一同の「子どもたちのために、帯広のために、“おび学”を成功させた」という熱意と相互の信頼感の醸成に努めました。

新型コロナウイルスの影響で、“おび学”の本格実施も6月にずれ込みましたが、大人自身が「変化が激しい社会」を実感したからこそ、「地域総ぐるみで、自分の人生を・帯広の未来を切り拓ける子どもを育てる」という思いが一層強くなりました。

各授業が軌道に乗り始めた中、11月になり本市でも感染が広がりましたが、対策を講じながら継続しています。年度始めと年度末のアンケートで子どもたちの変容を比較し、成果と課題を関係者で共有して、次年度の教育課程に生かす取組も進めています。

当研究所のホームページに、地域住民等への情報発信として関係資料や動画を掲載していますので、ぜひ、ご覧ください。（右のQRコードをご利用下さい）



文 芸

百人浜に学ぶ

えりも町立えりも中学校 玉手 広昭

えりも町は日高管内東端に位置し、豊かな水産資源と雄大な自然に恵まれた漁業と観光の町である。観光名所である「襟裳岬」は壮大な景観とともに「風極の地」と呼ばれる日本屈指の強風地帯でもある。

明治以降の襟裳岬周辺は、燃料確保のための伐採や牛・馬・羊の放牧地開拓によって原生林が切り開かれ、樹木に守られていた雑草は風速10m以上が年間270日以上という強風で飛ばされ「えりも砂漠」と化していた。砂漠化した大地からは赤土が舞い上がり、海に降り注ぐことで海藻類は根腐れをおこして採れなくなり、回遊魚や沿岸の魚も減少した。

そんな深刻な漁業被害を受けてきた地元漁師や営林署等によって、昭和28年から本格的な緑化事業が始まった。全国的に例がない“ゴタ”と呼ばれる雑海藻を利用した「えりも式緑化工法」や暴風垣の活用によって、半世紀以上にわたり緑を再生してきた歴史がある。

本校では、えりも高校とのえりも地区連携型中高一貫環境教育で「百人浜に学ぶ」取組を行っている。百人浜とは襟裳岬から約10km続く砂浜で、緑化事業の中心地である。内容は、講演会等の事前学習、「カミネッコ」という植樹用ポットの作成、現地で植樹体験など、地元の協力で進めている。平成18年から続いており、今年度コロナ禍で開催が危ぶまれたが、様々な対策を講じて実施することができた。この事業は、中高の連携とともに「ふるさと教育」として、生まれ故郷を学び、先人たちの偉大な取組を理解するための大変貴重な体験活動である。

今では森林の再生によって豊かな漁業資源も回復し「えりも産日高昆布」は特産品として有名になった。しかし、次世代へと伝え継ぐことが重要な課題であるため、町内の中高一貫教育推進の中心的な取組として、中学校時に「植樹」した木を高校時に生育状態を確認して枝はらいなどで「育樹」を行うという形で引き継ぐことで森林づくりに貢献するとともに、環境保全の大切さや先人たちの苦勞を理解することに繋げている。

現代は情報化社会から超スマート社会へ変革を遂げる中、自然環境を守るという原点を忘れることなく、学校としての役割を果たしていかなければならない。本校の取組は「歴史に学ぶ」とともに「地域に学ぶ」とても素晴らしい機会であると自負し、継続していこうと考えている。



なり手不足

羽幌町立天売小中学校 西山 智章

先日のテレビのニュースから考えさせられた。

「神戸市教育委員会は、市立学校の校長と教頭になるための筆記試験を全廃し、面談や本人の意向などを踏まえて登用する方針を決定しました。管理職の「なり手不足」が原因で…」

神戸市に限らず、全国的に教頭の「なり手不足」が起きつつあると耳にする。本道においても教頭昇任受験者の減少が深刻な問題になりそうだという。優秀な人材確保のためにもこの問題は解決すべきことであろうが、どうやら加速する傾向にあるらしい。神戸市は、かつての震災の影響で採用数を絞った世代が適齢期になったことを要因の一つとしているが、一般的には教頭へのネガティブなイメージがその大半を占めているようである。

誰よりも早い出勤と遅い退勤、校長と教職員との板挟み、調査物に追われる毎日、保護者からのクレーム対応、週7日出勤…。これらが一般的に思われている教頭像であろうか。さりとて、大方の教頭昇任受験の決断には、自校のポジティブな教頭イメージが背中を押してくれたのではなかろうか。

はて、数年前、教頭としての自分は教職員の目にどう映っていたのか？ 少なくともネガティブに感じられて

はいなかったように思える。多忙感は仕方ないにせよ、失敗を繰り返しながらも教頭職に張り合いを感じ、フィジカルもメンタルも良好な状態で業務に従事できていたように思える。

いや、従事させてもらっていた。

これは、当時の勤務校で出会ってきた校長らのおかげである。ありがたいことに、どの学校でも公私ともに御配慮くださり、教頭である自分にとって働きやすい仕事場にさせていただいていた。

教頭は、教員の頭（トップ）として、そのキャリアとスキルを生かし、教職員を伸ばし、時には直に生徒を指導しながらも経営方針のもとで学校をコントロールする。校長にとって至要な存在である。

生き生き、はつらつ、元気いっぱい、そして、プライベートを充実させながら業務をこなす。そんな活力あふれる教頭が活躍できる学校にするため、校長のできることを考え実行しよう。それが教育活動の活性化につながるだろう。そして、わずかながらも「なり手不足」解決に近づくかもしれない。

テレビのニュースからそう考えさせられた。



我が町で進む小中一貫教育

幕別町立忠類中学校 佐々木 典郎

本校は昨年、小中一貫コミュニティ・スクールとして新たにスタートした。様々な側面から小中連携が進む中、ここ数年「学習発表会」に行くことを大変楽しみにしている。つぶらな瞳で元気いっぱいに発表する児童の姿は格別であり、思わず拍手の連続、気がつくといつも手が痛い…。

その学習発表会では、児童の懸命な姿も素敵だが、いつも感心するのが小学校の先生方の指導である。劇中の小道具、衣装、バック絵等は、アイデアを凝らし参観者が役柄をイメージできるよう工夫されているものばかり。成長過程でまだ児童が至らないところに、先生方の適度なエッセンスが入っているのがよくわかる。さらに、器楽や合唱の指導、表現活動の指導等、つくづく「スーパーマン」だなあと感じてしまう。私も小学校免許を持つてはいるが、ミミズが這ったような字に絵は幼児レベル、楽器もひけず、ましてや器械体操の指導など…。

一方、我々中学校教師の自慢は高い専門性。教科指導に誇りとプライドをもち、子供の興味・関心をより高め

ることに自信をもつ。さらに、思春期を迎え自我と葛藤する子供を導き、進むべき道に灯りをともす生徒指導のプロでもある。もちろん、向き合う子供も発達が異なり、素直で純真な小学生も素敵だが、時には反抗しながら成長していく中学生もまた愛おしい。

中1になると不登校生徒が増える現状や教育課程の接続からの学力向上等「教育の多くの課題解決を小中一貫教育に見いだすことができる」と言われている。

小中一貫教育をすすめる取組は次の4点が挙げられている。①教育課程、指導に関する取組 ②人間関係の固定化を防ぐ取組 ③教職員交流に関する取組 ④地域、保護者との連携の取組。

特に③について、小学校教師と中学校教師が互いに認め合い、学び合うことで、子供への教育効果が高まることは間違いのないであろう。

そう考えたとき、学校現場に立つ我々が、それぞれのスキルと専門性を最大限生かしながら子供に向き合うことで、教育効果をより高めることはできないだろうか。そのためにも、人事交流等も含めて子供たちの学びのために、しっかりと手をつなぐことが必要だと思う。

後 期 情 報

北海道中学校長会 事務局長 木村 佳子

○今年度の活動を振り返って

今年度、北海道中学校長会は「叡智を結集し、羽撃（はた）く道中」を合い言葉として、全道20地区569人の会員相互の連携のもと本道の中学校教育を推進し、道民の信託に応えるべく活動を行ってきました。

今年度は特に、新型コロナウイルス感染症対策を講じながらの学校経営が最大の課題となりました。北海道教育委員会、北海道小学校長会をはじめとする関係機関とこれまで以上に緊密に連携しながら、地区校長会との情報共有を大切にして、新しい生活様式に基づく教育課程の再編と推進に取り組まなければなりません。

以下にお示しする内容はその一部です。

- 道小・道中・道公教連名による要望書の送付
- 臨時理事研修会に向けたアンケートの実施
- 道教委・道小・道中・道公教テレビ会議の開催
- 地区別教育経営研究会への参加(開催は4地区)
- 第3回理事研修会のWebによる開催
- 第62回北海道中学校長会研究大会函館大会の研究紀要による紙面開催
- 全日中三田村会長を迎えての情報交換会の実施

○道教委による各種施策への意見・要望の集約

特に、9月25日・26日に開催予定だった第62回北海道中学校長会研究大会函館大会は、4か年継続研究の初年度にあたる大会であり、中止となったことは本当に残念でした。函館市中学校長会の皆様の2年間にわたるきめ細かな準備に心より感謝を申し上げるとともに、来年度は第63回宗谷・稚内大会が恙なく実施されることを願っております。

このほか、10月31日に行われた、全日中三田村会長をお迎えしての意見交換会は、千歳市立千歳中学校を会場として行い、国に対する全日中としての働きかけを伺うとともに、北海道の課題や意見をお伝えする貴重な場となりました。

道中は新しい組織運営となって4年目となります。地区の皆様の支えがあり、関係機関の御支援と御協力により『オール北海道』で活動を推進してきております。課題は山積していますが、新学習指導要領の実施や働き方改革へ向けた対応をはじめとする教育改革の動向を見定めつつ、これからも本道の中学校教育の振興に努めて参りたいと思っております。今後ともよろしくお願いたします。

受賞おめでとうございます

令和2年度文部科学大臣表彰(教

育者表彰)を受賞されました。

☆ 鎌田 浩志 校長 (北海道中学校長会会長 岩見沢市立北村中学校)

道 中 事 務 局 日 誌

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
11	2	月	道教委生徒指導・学校安全課 情報提供・説明(越田)	10:00	札幌市立信濃中学校
		金	運営委員交流会(鎌田, 木村, 黒川, 運営委員, 専任職員)	10:30	道中事務所
	6	土	第4回理事研修会(五役, 副会長, 運営委員, 地区理事, 幹事, 専任職員)	13:30	ホテルライフオート札幌
		日	道中研全体研修会(函館実行委員会, 宗谷・稚内準備委員会, 空知・岩見沢実行委員会, 五役, 研修部, 専任職員)	15:30	ホテルライフオート札幌
		月	第48回HBC中学生作文コンクール最終審査会(吉本)	13:00	北海道放送
	7	土	北海道PTA連合会 第4回役員会・第4回正副委員長会(加藤)(書面開催)		
	11	水	第9回小中合同研修会(五役)(一部Web)	10:00	道小事務所
12	20	金	全日中第2回臨時常任委員会・新春座談会(鎌田)(Web)		岩見沢市立北村中学校
		土	北海道教育会議(越田)(書面開催)		札幌市立信濃中学校
	24	火	日本教育公務員弘済会北海道支部第2回幹事会(木村)(書面開催)		
	26	木	令和2年度第5回北海道公立学校教職員互助会理事会(三浦利)(Web)	10:30	千歳市立千歳中学校
	3	木	文科大臣教育者表彰式(鎌田)	11:55	ニッショーホール(東京)
	4	金	第7回事務局研修会(五役, 筆頭副会長, 幹事, 専任職員)(書面開催)		
1	11	金	3ブロック研修会(書面開催)		
		土	第1回女性教職員活躍推進会議(越田)(Web)	10:00	札幌市立信濃中学校
	14	月	第3回北海道男女平等参画審議会(越田)(書面会議)		
	17	木	北海道教育功績者表彰式(佐竹, 秋保, 鎌田)	11:00	ホテルライフオート札幌
	18	金	全日中第4回副会長連絡会(鎌田)(Web)	10:00	岩見沢市立北村中学校
22	金	全日中第3回常任理事会(鎌田)(Web)	10:00	岩見沢市立北村中学校	
	土	全日中第3回理事会(鎌田, 木村, 和田, 竹森)(Web)	13:00	各中学校	

北海道中学校長会
 発行者 会長 鎌田 浩志
 編集者 道中情報部

道中事務局
 札幌市中央区北1条西3丁目敷島プラザビル4F
 電 話 011-251-1344 F A X 011-251-1302
<http://www.dochu-kochokai.jp/>